

竹内洋 『大学という病』 中公叢書

中央公論新社、2001年 1,800円 (294ページ)

このところ大学にとってあまり喜べない本に話題が集まっている。立花隆『東大生はバカになったか』(2001年)に代表される大学生の学力低下や「~のできない大学生」、「教授が変われば大学が変わる」といった類の書である。遡れば鷲田小弥太著『大学教授になる方法』(1991年)あたりが今の先駆とすれば、日本が「失われた10年」にまさに入らんとする頃か。

本書の大部分を占めるのは、大学の病理や不快が取りざたされ、大学改革が言われている「いま」を取り扱っているわけではない。大学不信が大きな潮流となった昭和初期の東京帝国大学経済学部の派閥抗争に翻弄される教授たちを描いているのである。若き日の河合栄治郎、大内兵衛、矢内原忠雄そして丸山眞男といった面々が次から次へ登場する。ファッショナブルなモダンボーイである経済学部助教授、大森義太郎(1898-1940)を主人公に東京帝国「大学崩壊」のドラマが延々と展開される。筋立ても「大学版忠臣蔵」的、ドラマティックな仕立てなのでおもしろいが、消費される教授(第4章)、大学の授業はつまらない、講義は休講だらけ(第2章 黄色いノートと退屈な授業)といったところはいま読んでも古さを感じさせない。

しかし、著者がもっとも言わんとするところは第10章「大学は死んでいた」ではないだろうか。大学神話を揺るがしたのは、国家主義が表舞台に登場し始めたこと、ジャーナリズムという新たな知の場の発達そしてマルクス主義者を中心とした大学攻撃とアカデミック・スキャンダルをあげている。最近亡くなった仏人社会学者のピエール・ブルデューがしばしば引用されているところなどは興味深い。昭和3年から始まる大学をめぐる詳細な分析と考察から、いずれ大学院紛争が10年以内に起こるのでないかと予言している。それが紛争なのか改革なのか、あるいは再構築なのか、言い方の違いはあるにしても、大学知と大学人の内部的消費にとどまることが続くなれば、大いなる浪費につながるのではないかと、一方で危惧している。

いずれにしても、大学を舞台にした劇に終わりはなさそうだ。かりに幕引きがあっても、それが大学の病が完治できたとは思わないほうがいいのかも知れない。

(鈴木雄雅・上智大学教授)

紙幅の関係上引用の書籍タイトルは著者名、出版年のみとしましたが、参考までに下記のとおりです。

立花隆『東大生はバカになったのか』文藝春秋社、2001年

鷲田小弥太著『大学教授になる方法』青弓社、1991年